
「隼」異世界飛行記

沖田五十六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「隼」異世界飛行記

【Nコード】

N0832N

【作者名】

沖田五十六

【あらすじ】

1945年4月、大日本帝国陸軍少年兵の井上翼は、特攻作戦「菊水作戦」で、一式戦闘機三型甲で特攻する事になっていた。が、敵襲を受け雷雲に突っ込み見たことも無い空を飛んでいた。

一話 「雷鳴」

1945年4月、沖縄周辺のアメリカ艦隊に対して特攻作戦が行われていた。後の世で「菊水作戦」と呼ばれるものである。

九州のとある飛行場の滑走路（滑走路といっても、ただ整地された地面）に、一式戦闘機三型甲 通称「隼」が暖機運転をしていた。その隼に駆け寄る1人の小年兵がいた。

「整備員さん！機体の調子はどうですか！？」

エンジン音が轟く中、少年兵

いのうえつばさ
井上翼が大声で言った。

「エンジンの調子は良さそうです！後はあなたの腕次第です！」

整備員の一人が答えて、微笑んだ。

「分かりました！最期まで有り難うございます！」

翼がそう言い、操縦席に乗り込んだ。そう、この少年兵は今から特攻に向かうのである。この1式戦闘機の他にも、3機の1式戦闘機が暖機運転をしている。どの機体の下にも、250kg爆弾を抱えている。

操縦席に乗り込んだ翼は、無線機の電源を入れた。

（井上、準備できたか。出発するぞ。）

同世代の知り合いの声が聞こえた。

「分かった。靖国で会おう。」

無線の電源を切って、エンジン出力を上げた。

「コンターク！」

英語が訛った言葉を言って機体を発進させた。他の機体も続いて発進して行き、地上では多くの人が日の丸旗を振って見送った。今日の天気は晴れである。

数十分後、眼下は既に海であり、いつ敵襲を受けるか分からない空域となった。翼は無線の電源を入れた。

「敵の空母までどのくらいになったかな・・・」

（さあな。わかんねえけど、必ず近づいているさ。その時になったら、必ず沈めてやる！）

「・・・」

翼は、ため息をはいた。どうせ死ぬなら親しい女性でも作っておけばよかった、と思った。

その時、首筋に殺気を感じた。翼は辺りを見回す。すると、太陽を背に、数機の戦闘機が突っ込んできていた。

「上から敵機だ！散開しろ！」

無線機に怒鳴ったが、既に遅かった。1機の隼が機銃弾を浴び落ち

て行つた。

（谷の機体だ！畜生！）

知り合いの声が聞こえたが、それを聞いている余裕は無かつた。後ろに2機が付き、曳光弾が主翼にかすっていた。まずいと思い、辺りを見回した。とちょうどそこに雷雲らしき黒い雲があつた。

「おい！あの雷雲に突っ込むぞ！」

無線機に怒鳴つた。が、返事が帰ってくる事は無かつた。

「くそ！俺1人かよ……。」

歯がぎちぎちと鳴つた。が、今は生き残る事が先決である。機首を雷雲に向けた。敵の戦闘機も追ってきたが、すぐに退避した。雷雲に突っ込むのは危険だからである。

雷雲に突っ込み、視界が利かなくなった。所々で稲光がする中、隼は飛行していた。

「くそ……。なぜ助けられなかった！俺って奴は……。」

そう呟いたとき、目の前が真っ白になった。正確に言えば、雷が隼に直撃した。

その光が消えた後、そこに隼と翼は「消滅」した。彼がその後何処に行ったか、後世では「戦死」した事になっている。

一話 「雷鳴」(後書き)

ご感想をお願いします。また、この小説は4日に1回の割合で更新していくと思います。

登場人物紹介

いのうえこはる 井上翼 大日本帝国少年兵(18歳) 一式戦闘機に乗り、敵艦に向かって飛んでいたところを攻撃され、雷雲に逃げ込み異世界へ、性格は優しいが、大切な者や親しい人を攻撃されると性格が一変、攻撃した相手を倒すまで戦い続ける。志は不殺じんぎやうであり、性格が変わっても相手を殺す事は無い。

「異世界」

「う．．．」

エンジン音がする中、翼は目を覚ました。

（何があっただんだ．．。）

少しボーとする頭で考えた。

（そうだった。雷に打たれたんだ．．ここは？）

翼は操縦席の外を見た。そこには、青い海 ではなく青々とした森が広がっており、地平線には山脈らしき山々が連なっていた。

（！？ついさっきまで海上を飛んでいたのに！？）

少し混乱しながら、磁気羅針盤（機首が向いている方向を記す羅針盤）を見た。南西方向を向いている。

（とりあえず、基地の方向に行ってみるか．．．。）

翼は機首を北東に向け、エンジン出力を巡航速力まで下げた。

約300km地点まで来たが、基地どころか、海の姿も無かった。

（おかしい。基地はここにある筈だけど．．．）

何処を見回しても、森しかない。

（とにかく、降りれるところを探さないと・・・）

すると機首の方向に、小さな村のような集落と、降りるのには十分な広さの平原があった。

（よし。とりあえずあそこに降りよう。）

そう思い、隼を降下させていった。

同時刻、翼の見つけた村、名をスピット村と言った。そこには西洋風の家が立ち並び、教会もある。そのうちの一軒は、治安維持のために騎士が数名駐屯していた。その家の入り口に複数の子供が立っていた。みんな、震えていた。

「サラお姉ちゃん居る？」

子供の1人が家に向かって言った。すると、ドアが開き金髪の少女が出てきた。

「どうしたの？みんな怖がってるみたいけど・・・」

金髪の少女 サラは子供達に聞いた。

「うん。村の近くの原っぱで遊んでたら、龍の呻き声がしたんだ。時間が経って行くにつれて声が大きくなって、空を見たらドラゴンが飛んで行ったんだよ。みんな怖くなってここに来たんだ。」

「ドラゴンですって!？」

この世界では、ドラゴンやグリフォン等の幻獣が生息している。ただし、その多くは町には下りてこない。

「分かったわ。すぐやつつけて来るから、安心して。」

サラはそう言っただけで家の中に入り、壁にかけてあった両刃の片手剣を手にした。

「そのドラゴンって何処に居るの？」

サラが子供に聞いた。

「東の原っぱに降りたのを見たよ。」

サラはそれを聞いて、東の草原に走った。その後を子供達が遅れながらもついていった。

一方、隼を草原に着陸させた翼は、操縦席の後ろを探っていた。

「確かここに・・・あった。」

翼が取り出したのは、大日本帝国正式小銃三八式歩兵銃（三十年式銃剣装着済み）だった。それと、30発ほどの弾丸も取り出した。

翼は操縦席から出て、主翼に座った。三八式歩兵銃に弾丸を装填しつつ、周りを見回した。どう見ても日本に、特に九州南部に生えているような木が無いのである。上空から見た村は、木に遮られて屋根しか見えない。

（とりあえず、あの村に行ってみるか・・・）

その時、後ろの方から足音がして振り返った。すると、何人かの子供と剣を構えている金髪の少女が居た。

（金髪・・・アメリカ人か！？）

そう思つて、三八式歩兵銃を構えた。

「・・・あなたは何者なの？」

金髪の少女が言ってきた。アメリカ人も喋れるのかと思つたが、まずこの場所を聞くのが先決だと思つた。

「一つ聞きたいんだが、ここは何処だ？少なくとも日本では無いようだけど。」

「ニホン？そんな国知らないわよ。ここは、マリーン王国のスピット村よ。それより、そのドラゴンは何？見た限りは生き物では無いよね。」

金髪の少女が、隼を指差して言つた。翼は三八式小銃を下ろした。

「ドラゴン？ああ、こいつの事か。こいつは大日本帝国陸軍の1式戦闘機三型甲「隼」だ。飛行機だよ。」

すると少女は、わけが分からないという顔になった。

「ダイニホン帝国？イッシキセントウキ？ヒコウキ？何それ・・・」

」

何だこいつ、飛行機も知らないのか？と思った。しかも、日本も知らないのである。考えられるとしたら、まだ未開の地に住む原住民か、日本が無い世界いわゆる異世界って奴か、アメリカ軍による錯乱か。前者は少女の服から無いとして、後者はそんな暇があるなら、日本に侵攻するはずだから無い。という事は・・・

「ここはまさか・・・異世界なのか？」

「は？異世界って、何言ってるの？そんなのある筈無いでしょ。」

少女が否定してきたが、そのまさかである。

「その・・・えーと、名前は？」

とりあえず、名前を聞くだけ聞こうと思い、少女に聞いた。

「相手に名前を聞く前に、自分から名乗るのが礼儀よ。」

「あ、ごめん。俺の名前は井上翼。翼って呼んでくれ。」

「サラよ。サラ・ラバウル。」

隼の主翼から下りて、サラの前に立った。

「まず、あなたの正体を教えて。何処から来たのか、何しに来たのかを。」

「ああ。まず、俺は大日本帝国陸軍神風特別攻撃隊の1人だ、って

言ってもわからないよな・・・」

翼はまず、近代日本（明治元年～昭和20年）の歴史を話し、元の世界とこの世界は別の物という事を話した。

「・・・簡単に言えば、俺はその異世界の戦争で、この飛行機で敵の軍艦を攻撃、沈めようとしていたんだ。それに失敗して雷雲に入ったら雷に打たれて、気付いたらここに居たんだ。」

「・・・あなた、頭大丈夫なの？まず、この金属の塊が飛ぶわけ無いでしょ。飛ばせるものなら飛ばしてみなさいよ。」

その時、翼は頭にカチンと来た。

「分かったよ。飛ばしてやるよ。よく見とけ。」

そういうと、操縦席の後ろに歩兵銃わしまって、エンジンの電源スイッチを入れた。この隼には、セルモーターが付いており、クランクを回さなくてもエンジンが付いた。

「サラ！危ないから、機体から離れる！」

翼はそう叫んで風防を閉めた。

「本当に飛ばせるのかしら。」

サラは、前にある鉄の塊、ヒコウキというらしいが、飛べないと思っていた。さつきから風車のような物が回っているけど、全然動いてないからである。しかし、その考えはすぐに消えた。鉄の塊が動

き始めたのである。そして加速して行き、後ろ側が浮き始めた。そう思っていたら、足らしき物も地面から離れ、本当に空を飛んだのである。

「嘘……。鉄の塊が空を飛ぶなんて……。」

サラは啞然とした。しかも、自分の知っている中では一番速いのである。その後、しばらくしてヒコウキが降りて来た。サラたちの前で停止したヒコウキに付いている窓が開き、翼が出てきた。

「どうだ？これで俺が異世界出身ってことが分かったろ？」

「……そうみたいね……。認めるわ。」

「じゃあ、改めて。俺は井上翼だ。」

翼が手を出した。

「私はサラ・ラバウルよ。」

サラはその手を握った。

この出会いが、未来を変えることも知らず……

「異世界」(後書き)

ご意見、感想をお願いします。

キャラクター紹介

サラ・ラバウル 通称 サラ

翼が見つけた村の守備(警察)の騎士。剣や銃の腕はピカ一。ただし、家事その他は一切いない。性格は、素直にならない。金髪の16歳。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0832n/>

「隼」異世界飛行記

2010年10月10日16時53分発行